

〈一人ビブリオバトル2〉

映画人になりたかった学者と活動家になりたかった活動家と
大嶽秀夫著 酒井大輔・宗前清貞編著『日本政治研究事始め』
vs 外山恒一『政治活動入門』

鈴木 健吾

国際学生運動の記念年も過ぎ、「政治の季節」も歴史化が著しい。活動家出身でもなくかつ本格的な知的生活が10年少々の評者できえ、ノンセクト出身者がしゃべるようになったというのは隔世の感がある。オーラル・ヒストリーの蓄積や本学も含めた大学史の更新はいわゆるニューレフトの資料化に貢献するだろう。

しかし、「新・新左翼」とでも言おうか、アイデンティティポリティクスに絡む米欧の左翼の世代更新の中で歴史意識のない運動家・知識人の増大は殊に近年甚だしい。サパティスタ民族解放戦線辺りから左翼運動の系譜を描く手癖がどこから来ているのかは評者にはわからないが、思想と運動が骨絡みであった世紀は終わって久しいが、なればこそ、「党の歴史」をかける人間が一前々号拙稿で取り上げた共産党史以外の一新左翼の歴史的研究でも必要であるといえよう。無論、当事者による引かれ者の小唄ではなくて、である。

そのような感情もあり今回新左翼を取り巻く歴史状況についての近刊を探したが、結局選んだのは焼け跡世代のオーラル・ヒストリーと団塊ジュニア近傍のファシズムの政治運動論が一冊ずつ、これまた前稿に引き続き「うな重とショートケーキ」の誹りを買いにいく組み合わせになった。奇を衒っているという評価は甘んじて受けるが、一方親子ほどの年代差と社会的な立場の違いに反して、政治の季節を生ききった二人の共時性は実は選書した評者自身が驚いてもいるのである。

○「長い目でみると、鬱になったのもよい経験だったと思うようになった」

2003年の中公新書『日本型ポピュリズム』「あとがき」で一人の政治学者が——おそらく当時ではまだ珍しかったであろう——国立大学教授現職で鬱を告白した。大嶽秀夫（1943～）、「レヴァイアサン・グループ」を牽引し、「丸山学派」との論争でも知られる戦後日本の政治学きっての大家であり、当時の京大法学部きってのメディア知識人でもある。その後京大退職の前後に出版された『新左翼の遺産——ニューレフトからポストモダンへ——』（東京大学出版会 2007年）から政治学からの新左翼やフェミニズムの研究に舵を切っていたが、その過程でその名前を知った2010年代の大学生である評者にとって大嶽は社会運動史家と大差なくイメージしてしまう。これは旧世代からすれば「とんでも」もいところなのだろうが、政治学が「質的分析」と「量的分析」のクレバスの上にある学問分野であることも手伝い、大嶽は特別イメージしにくい人物として残っている。

恐らく答え合わせをするだけなら簡単で、『フェミニズムの政治学』（東京大学出版会 2017年）「あとがき」にある通り、大嶽が東大での院生時代塩見孝也と研究会をするような新左翼シンパ出身であり、同時にアメリカ留学から「ポリサイ」という武器を手に入れて日本に輸入した当事者でもあるからである。しかし、学者の学問形成と社会・運動という問題は答えだけわかるのが一番困るところがあり、その意味では政治学徒にも評者のような門外漢にも待たれたのが大嶽秀夫著 酒井大輔・宗前清貞編著『日本政治研究事始め 大嶽秀夫オーラル・ヒストリー』（ナカニシヤ出版 2021年）であった。インタビュー二人のうち、宗前は東北大での大嶽門下の研究者・酒井は大嶽（レヴァイアサングループ）を基軸とした戦後日本政治学史を研究する在野研究者であり、隙の無い布陣の期待値が高まる。

第一章「政治学との出会い」では現状分析家でありながら現代史叙述と「固有名詞」を好み、学内行政は嫌いだが学内政治は得意な大嶽の来歴が、『『レヴァイアサン』の三人』こと大嶽・村松岐夫・猪口孝が高校2年生ころまで理系だったことから語られ始める。岐阜・多治見出身の大嶽は外交官への憧れから京大法学部に進学するも法律に興味を失い、法律の授業を受ける必要のなかった京大法学部で政治学にコースを切っていく。勝田吉太郎・高坂正堯を経て猪木正道にたどり着いた大嶽青年はしかし、演劇を愛し「創造座」に出入りしながらデモに繰り出し、吉本隆明の講演会に行く左翼青年だった。ロシア革命史の専門家である猪木の「自分はマルキストなんかよりずっと左派だ」（30頁）の言を引く大嶽からは服部龍二『高坂正堯』（中公新書 2018年）にも取り上げられた、選挙で自民党に入れない右派としての京大法学部の民主社会主義的な風土が手に取るように感じられる。しかし、新左翼との付き合いの中で指導教

員との関係に隙間風が吹く中、当時京大で空き講座だった日本政治史を専攻するべく（あるいは「モラトリアム」の延伸のため）東大を受験する。

第二章「東大紛争のなかで」は東大法学部の日本政治史への進学に失敗した大嶽の院浪から始まる。曲折を経て岡義達のゼミに所属し、「外様」としての院生生活を開始する。丸山眞男のゼミに出るも「漢文」に苦戦し、京極純一のゼミに出るも計量分析をやる気もなかった大嶽は当時学問とはみなされなかったアクチュアルな対象—自民党の研究を志すが、修士論文学年での東大紛争の勃発が大嶽の運命を変えていく。公民権運動研究で修論を書いた大嶽は中立的な立場をフル活用しつつ法学部の大学院生協議会を実動させ、助手を学卒から院卒にするように交渉するが、交渉は失敗、大嶽は当時院生身分では珍しかったフルブライト奨学金による渡米を決断する。折しも外国人日本研究者による自民党政権研究が出版され始めていた。

第三章「アメリカに渡って」はハワイでの語学研修を経てシカゴ大学に留学した大嶽の様子が描かれる。ハンス・モーゲンソーなどの看板教授を擁した同大政治学で著者は指導教授ピーターソンのもと研究に邁進し、イーストンなどのゼミに出ながら政治構造の認識やパターンによる推論などの必要性を認識する。多元主義を同大で学んだものではないとする一方、余技ではない専門分野としての自民党研究の必要性への認識を新たにした大嶽は博論提出資格を得ながら帰国の途につく。第四章「日本政治研究の視角」では「外様」の悲哀か、東大の助手になれなかった大嶽の就職と博論執筆描かれる。専修大に職を得つつ学生身分を継続した大嶽は同時代の新聞の切り抜きや政治家へのインタビューなど当時目新しかった（！）手法によって新日鉄合併などの政策決定過程の分析を行い『現代日本の政治権力経済権力』（三一書房 1979 年）に結実する博論を完成させる。新しすぎた研究のもとには「サントリー」からよくわからない電話が入り、政治学分野で最初の冠を頂いた。第五章「仙台での生活」では在外研究を経て東北大に赴任し空き講座だった政治学で低学年に戦後日本政治を教えながらの生活が描かれる。80 年代いわゆる新保守主義の流行の中、自民党政権への分析能力の高い大嶽への公共知識人的需要は高まるが、日本の軍需産業への評価の違いから大嶽は安江良介主導下の岩波書店（『世界』）と絶縁、管理社会への警戒感やフェミニズム政治学の可能性を語りながら恐らく当人も望まぬ右向きの急カーブを曲がっていく。

第六章「ドイツ留学の決断」では政策決定論から比較政治学へと舵を切る二度目の準備期間としての 30 代末の西ドイツ留学が描かれる。西ドイツ政治学を左翼的で参考にならないとしつつ、緑の党の勃興を看取しているのも興味深い。比較政治学的興味は『アデナウアーと吉田茂』（中央公論社 1986 年）という「誰でも思い付くよう

なアイデア」(178頁)で先着する。しかし、日独比較を続ける意志はなかった。それを「ひとりで行う比較研究」の難しさに帰結させる大嶽だが、第七章「レヴァイアサン・グループ」の発足に関わるだろう。1985年の帰国前後に村松岐夫・猪口孝らとの協議の中、印象批評的な夜店としての日本政治研究からの脱却を意図した雑誌『レヴァイアサン』が発足する。松下圭一による出版社の斡旋など多様なアクターが絡みつつの雑誌の船出は注目を集めたが東大法学部の現役スタッフがいなかったことは同学部との関係を悪化させた。同時期の山口定との中曽根政権の性格をめぐる論争(山口・大嶽論争)や『UP』への政治学の大作の書評の連載、そして丸山政治学への辛辣な書評も含めて、戦前世代による政治学とポリティカルサイエンスとの切断者としての大嶽秀夫がここに誕生した。

前章末から第八章「京都での日々」にかけて村松の慇懃もあり「京大さん」(221頁)大嶽は母校に錦を飾る。研究も大平政権～中曽根政権の政策とブレントラストを分析した『自由主義的改革の時代』(中央公論社 1994年)において国鉄・国労をつぶしたモダンな自由主義的で右翼、中曽根像を打ち出し、昭和末の自民党の文化重視の路線に一定の評価を与える一方、派閥による政治を重視し平成の政治改革に辛辣な大嶽。「社会党のような社会主義政党より」80年代自民党の方が「日本を新しくする」(231頁)と評価する彼のもとにはサントリー文化財団の審査委員やテレビ番組『ウェークアップ!』のコメンテーターの役回りも舞い込んだ。

しかし大嶽の走る道にはもう一つの左向きの急カーブが待っていた。第九章「新しい研究へ」はポスト・モダン状況での政治学を研究するため1999年にフランスに旅立つ大嶽が描かれる。ポピュリズム・ニューレフト・フェミニズム…当人をして「どうして僕の仕事を誰かが継承しないのか」(261頁)不思議がる21世紀の大嶽が(仏滞在中の鬱の自覚と共に)現出する。京大退職時刊行の『新左翼の遺産』は『戦後政治と政治学』(東京大学出版会1994年)、『高度成長期の政治学』(同出版会1999年)と並び三部作として認識された。第十章「政治学の将来」では同志社女子大学転任後、ジェンダー研究や日仏の「官僚国家」の比較を続けつつ、『レヴァイアサン』廃刊に絡めながら日本政治と政治学の将来について語る。

一読して「プロ教師」諏訪哲二との朝日新聞書評委員を通じた交友(262頁)などのディテールに政治学(者)事典と見まがうような膨大な傍注とも合わせて目を奪われるが、精読すると京大・東大で新左翼活動経験を持った人物が80年代の自民党の新保守主義・新自由主義に肯定的になっていく、その様を追体験できることに驚かされる。比較可能性がありそうなものとしてブントから新自由主義への道行きを描いた青木昌彦の自伝『人生越境ゲーム』(日本経済新聞社2008年)があろうが、「党生

活者」的経験の乏しさに加えて出始めの海外学位の置き所のなさや「純血主義」の気風が残っている時期の東大法学部との関係が独自性を生んでいよう。無論、オーラル後に出された『平成政治史』（ちくま新書 2020年）「あとがき」が語る仙谷由人からの民主党ブレーン勧誘など80～90年代の大嶽の位相などの疑問も生じる。しかし、いわゆる駒場系知識人とも異なって明確な「転向」を経ずに「右傾化」していく知識人のサンプルは戦後日本を対象にすると極めて乏しく、日本現代史の前線が時代を下る中、「生活保守主義」や「文化の時代」に現代史の鍬を入れるにも重宝するだろう。漢文が苦手な草書の書簡が読めず英仏独の三か国語を解する、ある日本政治史の大家の一代記。

（税込 3960円 350頁）

○「捕まったら、ラッキーぐらいに構えておけばいい」

外山恒一（1970～）という、2007年の東京都知事選で中指を上にあげた様子と福岡にてファシズム団体「我々団」を運営する自称・他称ともに「ファシスト」としての像が目につく。メディアにキャッチされる能力とは内在的理解を得ることとは時に背反するので、そもそも外山が80年代の反管理教育闘争からの筋金入りの左翼運動の「闘士」であることを知っている時点でそれなりに外山に興味がある人だろう。実際、コロナ禍中での高円寺での「一人飲み」パフォーマンスなどに活動家的センスは感じて、知識人としてのセンスを感じる人は少ないかもしれない。しかし、その外山こそが『全共闘以後』（イースト・プレス 2018年）という浩瀚な著作によりポスト1970年代—前記の大嶽秀夫が国鉄スト権スト敗退などを以て日本政治の転換点とした1975年（大嶽秀夫「日本政治と政治学の転換点としての一九七五年」『レヴァイアサン』40 2007年）以後—外山のいうところ「80年安保」を担った「ドブネズミ」系活動家の研究を大成させた日本における学生運動衰退後の学生運動研究の大家なのである。東大・京大をはじめ昭和50年代以降も学生運動が可視的に続いた大学の多さに鑑みるときにむしろ「研究者・外山恒一」こそ評価されるべきであろう。

しかし、社会運動史の哀しみというか、運動当事者でない身にとって『全共闘以後』は固有名詞の消化だけでもかなりの負担であり、だからといって『良いテロリストのための教科書』（青林堂 2017年）のような「啓蒙書」には確かに右派の反原発運動の指摘など鋭くアクチュアルな指摘はあっても、浩瀚な著作をものにした当事者としての社会運動史家・外山の知識と「ファシスト」としての運動論がうまく結びついていないように思えた。それこそ「軍人の軍事史」で歴史家以上に一家をなしたものがあるように、外山に活動家＝歴史家としての代表作を欲していたのは評者のみならず

それなりにいるだろう。そうでないと外山の博搜は、1970年7月7日の華青闘告発の重視に顕著なように『1968年』（ちくま新書 2006年）などの著作を持つ批評家桂秀実のエピゴーネン（乃至その系譜を継ぐ新左翼系のデータコレクター）の評価を受けかねないとも思っていた。

一般に著者への勝手な期待は裏切られるためにあるが、今回はその限りではなかった。外山恒一『政治活動入門』（一万年書房 2021年）は社会運動の当事者的研究者としての外山と「ファシスト」活動家としての外山が漸く交差した一冊である。「そうだ、世の中のせいにしよう。」と書かれたゆるいデザインの帯がまず笑いを誘う。全編を（外山の想定する）政治意識の高い大学学部生向けとするのはおそらくマーケティングとしては正しく、本書を読みやすいものになっている。

第1章「政治活動入門」では政治活動≠選挙運動を確認し、各人のもつ「生きがたさ」のうち、同時代に集合的にある意識を「政治活動」によって解決することを主張する。しかし運動は拙速に始めてはならず、「勉強」しなければならない。自分で考えたことは先人も考えている可能性が高いからである。そうして、異なる世代間を結び付ける固有名詞=教養の重要性を、あくまで活動をメインとし勉強の自己目的化を戒めながら、政治と芸術との類似と偏差、そして政治—学問—芸術の連環がほどけた特殊な時代としてのここ30年程の日本、という外山の問題意識の根幹に分け入っていく。この三位一体を令和になっても信じる外山からすれば「学問や芸術への転身は、政治活動に“挫折”してからでも遅くはない」（20頁）のである。そして党史的な認識を重視する外山は「右翼でも左翼でもない態度」を現状肯定として否認、正義感ではなく被害者意識に基づく暴力的な運動実践へと読者を導いていく。

第2章「学生運動入門」では学生運動は（実は）勝利しているという外山の歴史観を披歴しつつ、学生運動の消滅という日本の特殊性に疑問を呈していく。それは現状認識以外に、90年代前半を学生運動の消失点とする研究者・外山が現状の社会運動史研究に持つ不満の暴露でもある。反原発運動の勃興に従いつつ年代観の違いゆえに学生運動復活に希望を、学生との日常的なかかわりから学生運動の凝集点を作ることができていない現役の学生に苦言を呈する。

そして第3章「“戦後史”非入門」では外山の歴史認識が披露される。外山によれば現状日本（と世界）は戦時下—冷戦を第三次世界大戦として第四次世界大戦下—にある。大方の見当通り、これはネグリ&ハートの対テロ戦争認識の翻案（帝国の「世界内戦」）なのだが、さらに外山はそれを疑い、1914～89年を一つの時代とし、56年を前後に冷戦と熱戦に区切ることを提唱する。一次大戦の結果生じた米国の圧倒的な国力による資本主義（民主主義）陣営、ソ連の共産主義陣営、そして第三の道とし

てのファシズム陣営が抗争した第二次世界大戦、そしてその戦争を切断した 1956 年のスターリン批判である。入門書として 60 年安保以前の日本の擬似占領状態、コミンフォルムから六全協へと続く日本共産党の武力闘争方針など日本の内政へのフォローも忘れない。そして、1956 年以降の世界において新左翼運動を「無自覚なファシズム運動」とみなすという問題提起を行う。

第 4 章「学生運動史入門」はポスト 56 年期の学生運動史が詳述される。具体的には日本共産党からのブント・革共同のスピアウトより 68 年期のノンセクト・ラジカルの台頭、それによる共産党主導の大学自治会の失権を重視する。全共闘の戦後民主主義批判によるわだつみの像破壊（1969 / 5）から翌年の華青闘告発へという流れを書く中、全共闘自体が党派の綱引きとなる。しかし、新左翼の内ゲバの陰惨さもあり、新左翼からポストモダン思想への接続関係が日本の場合は不明瞭になった。韓国やフィリピンに起きたのと同様の「89 年革命」が日本の土井社会党から 55 年体制崩壊において日本でも起こっていたとするマクロな指摘と反管理教育運動や反原発ニューウェーブのような 80 年代社会運動の描写は外山の独壇場であろう。在特会や首都圏反原発にも目配りしつつ、叙述は理論部分へ向かう。そもそも外山においては反米反ソの新左翼運動は「ファシズム」に至る可能性を内包していた。それは前衛党による進歩史観への批判の中、下層民衆の土着性に新左翼が興味を移していったことなどからも推測できよう。しかし、華青闘告発によるアイデンティティポリティクスへの新左翼の傾斜の結果、ファシズムへの転化の可能性は失われた。今日の「テロとの戦争」による警察権力の増大と平仄を合わせたポリティカルコレクトネスの瀰漫を外山は（グローバルな）新左翼の勝利の過程とみる。そして 1995 年のオウム真理教事件により欧米に先駆けて警察権力が増大した日本は、外山に言わせれば、戦時下なのである。

第 5 章「ファシズム入門」は冒頭で「5 つの選択肢」としてアメリカニズム・共産主義・ファシズム・アナキズム・ナショナリズムを提示し、ファシズムとナショナリズムの親和性を再度指摘する。そしてバクーニン由来のアナキズムとフランス右翼由来のファシズムがイタリアのファッショに結実していく過程を描写しつつ、ファシズムの内容のなさ、「代入」の融通無碍さをアピールする。そして思想・運動的な理論を持たないがゆえに普遍主義になりえないファシズムが個人をアトム化し、環境管理型権力に回収されることそして発達した資本主義の果てにあると「左翼」外山が構想する共産主義革命へのカウンターとすることを主張する。規律化された共産主義社会への先受けとしてファシズムが想定されるのである。「同盟軍」としてのナショナリストとの関係性など、今後の課題もおわせつつ本編が閉じられる。

さらに実践ハウツーとしての「付記」は一読の価値がある。一つ恥をさらせば、公職選挙法と83年道知事選での横路勝手連、そして外山の候補者褒め殺し型の反原発運動の関係性を評者は本書で初めて知った。ハウツーは徹底しており自身の一般的な刑事犯としての入獄の経験から堀の中の社会への想像力を喚起し、「捕まったら、ラッキー」と明言して筆は擱かれる。

一目理論編と実践編の二部構成にしたほうがよかったのではないか、という構成上の疑問はわくし、歴史観については新自由主義は「総動員」解除ではないのかという野暮な指摘も捨てきれない。また、外山の本を複数冊読んだ読者からすると論点に新規性はなく、既述『全共闘以後』あるいはより刊行年の古い『青いムーブメント』（彩流社 2008年）などの方が社会運動史としては裨益しようか。

しかし、本書が党機関誌『人民の敵』を読んでいたようなコアな支持者ではなく明らかな入門書・啓蒙書として書かれ、その中でファシズムが資本主義、そして来るべき共産革命への抵抗としての革命勢力として意味付けられたのは大きい。これは桂秀実のみならず、戦闘的アナキストとして独自の思想世界を持つ千坂恭二やアナルコキャピタリズムの論客としてもならした作家の笠井潔の思想（本書に先行する議論として外山はその三人を上げる）の総合に外山が成功しつつあることと密接に関係する。我々団の執権への支持如何を問わず、緻密な党史を踏まえて乱暴な理論を唱える——人の活動家が知命にして自立しつつある、その過程をみたい人にお勧めしたい。

（税込2090円 248頁）

この二冊というか、著者二人は言うまでもないが、内在的な相性がよくはない。昭和50年以後に日本の社会運動の可能性を見ないマクロな視点の政治学者大嶽のストーリーが終わった後の世界に、内ゲバとは別の世界に生きる一見享乐的でさえある80年代の活動家を描く外山の低徊趣味にも似た社会運動史叙述が続くからである。しかし「併せて読めば戦後の社会運動がわかります」のようなセールストークではなくて、政治＝学問＝芸術の世界を真摯に生きた二人は併読するとより視野が広がるだろう。

ちなみに「(運動への投企ではなくて)「あえて」性のない学問や芸術に、存在意味はありません」(19頁)としつつ、生業をミュージシャンとする外山は言うに及ばないが、演劇青年大嶽は京大法出身の大島渚のもとを訪ねて就職を断られていることを「日本映画界は、大事な人材を失った(笑)」(41頁)とする。芸術から学問への道か至高の地位たる政治(運動)の貫徹か、2人が三者の区別がない世界を生きてきたことを思うとき、意外に両者は他人の空似でもなかったのかもしれない。